

●サルヴァトーレ・シャリーノ (1947~)

『アジタート・カンタービレ』 —距離の上のカプリッチョ—

ソロ・ホルンのための (2020)

「アジタート」と「カンタービレ」という、一見相反するようなことばをタイトルにするこの作品は、クラングフォルム・ウィーンの委嘱によって作曲された。「アジタート」は息せき切った一種のせわしなさを、そして「カンタービレ」は人間の声による大らかな歌を意味するので、矛盾をはらむタイトルとさえ見なしうるが、シャリーノにとって声はけって落ち着きを表すものではない。それは彼の音楽に常について回る「静寂」や「沈黙」が、けって落ち着いた静的なものではなく、非常に熱く、おぞましさに似た感覚を内に秘めていることと相同である。そしてそこには、作品を常にひとによって聴かれるもの、聴かれることによって成立するものとして捉えてきたシャリーノの創作美学的な立場がある。例えば、極度の沈黙をひたすら聴くことは、聴くひとの「聴」に対する意識を目覚めさせ、内なる自己との熱い対話を促す。ホルン独奏のための本作品も、冒頭の長い静寂から、ソロによるポリフォニックな可能性へと移っていく。副題の *Capriccio sulla lontananza* は、J. S. バッハの初期作品 BWV 992 「最愛の兄の旅立ちに寄せて *Capriccio sopra la lontananza del suo fratello diletissimo*」をもじったものと思われるが、距離の上に奏されるカプリッチョ、すなわち繰り返される音型は常に遠近感を変え、二者の対話のように響く。バッハに似たポリフォニーである。

初演 2020年8月12日 ザルツブルク音楽祭
クリストフ・ヴァルター (ホルン)
委嘱 クラングフォルム・ウィーン

●レベッカ・サンダース (1967~)

『行きつ戻りつ』

ヴァイオリンとオーボエのための (2010)

シュターツカペレ・ドレスデンの委嘱で書かれた『行きつ戻りつ』についてのコメントで、サンダースはサミュエル・ベケットがフェルドマンのために書いたオペラ台本『ニーザー』(1962)の冒頭を掲げている。「影のなかを行きつ戻りつ内なる影から外の影へ」。最初にフェルドマンがベルリンで受け取ったテキストはちょっとだけ違っていた。「影のなかを行きつ戻りつ、外の影から内なる影へ」。そしていずれにも「達し得ない自己から達し得ない非自己へ行きつ戻りつ」というようなテキストが続く。オペラの場合は「ニーザーという方法によって」という結語を加えて。自己の内部も外部も、いずれも影という曖昧なものではなく、その両者をむすぶ対話もきわめてフラジャイルなものに過ぎない。ベケットの場合、対話があるとしてもそれは「あれでもこれでもない」ものによる行きつ戻りつのものでしか捉えられない。サンダースはサウンドの背後にあるものの感触や物質性や色彩をなんとかサウンドのなかで表現しようとしてきたが、ここでそれはきわめて陰画的な形で達成されている／いない。空間的に離れた位置にあるヴァイオリンとオーボエは、互いに音型や響きを共有しながら、一体となるわけでも乖離するわけでもなく「なにものでもないもの」になる。

初演 2010年6月3日 ザクセン州立歌劇場(ドレスデン)
カイ・フォーグラール(ヴァイオリン)、セリーヌ・モワネ(オーボエ)
委嘱 シュターツカペレ・ドレスデン

●オルガ・ノイヴィルト (1968~)

『夜と氷のなかで』

ファゴットとアコーディオンのための (2006/07)

現代オーストリアでもっとも注目されている作曲家のひとりノイヴィルトは、美術や文学、映画をはじめとする広範な文化的素養と教養を持ち、またポップ・カルチャーに抱く共感もあって、きわめて多彩な創作活動を展開しており、作品もすこぶる多様な現れ方をしている。極度に前衛的な響きのする作品も少なくないが、それらは決まって過激な騒音性を孕み(音の多さはノイヴィルト作品には常につきまとう)、同時に演奏家に高度な技術を課している。『夜と氷のなかで』というタイトルは、ノイヴィルトの守備範囲を勘案すると、ラダウツィ(現ルーマニア領)出身のパレエ・ダンサーで映画俳優・監督でもあったミーメ・ミスがタイタニック号の沈没を初めて映画化した1912年の同名の無声映画から取られたと思われるが(映画との内容上の関係は認められない)、ファゴットとリング変調(ふたつの波形をかけ合わせて新たな波形を産み出すこと)されたチェロによるヴァージョンのほか、本日演奏されるファゴットとアコーディオンのヴァージョンがある。いずれも多岐にわたるファゴットの奏法を駆使しながら、それがデュオにまわった楽器との相乗効果によって、陰しく暗鬱にして冷徹なサウンドを産み出していく。

初演 2007年8月19日 ウィーン・コンツェルトハウス 大ホール
委嘱 ローレライ・ダウリング(ファゴット)、クラシミール・ステレフ(アコーディオン)

●ゲオルク・フリードリヒ・ハース (1953~)

『光のなかへ』

ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための (2007)

2017年のサントリーホールでのサマーフェスティバルにおいて日本初演されたこの作品は、いわゆるピアノ三重奏の編成。作曲家としても知られる音楽著述家のバーリント・アンドラーシュ・ヴァ

ルガがユニヴェルザール社を引退する際の記念演奏会のために作曲されたもの。ハースは生まれこそグラーツだが、幼年時代をスイスとの国境に近いフォアアールベルクで過ごした。彼にとって脅威と映った周囲の山々と、それらに囲まれて陽光少ない狭い谷間の生活は、自然の持つ暗黒の力をハースの心情に植え付けた。弟たちとは異なって地元のアレマン方言も憶えなかったハースは、常にアウトサイダー的な意識を持ちつつ、そのまま過酷な作曲の世界に入っている。精神を病んだ画家アドルフ・ヴェルフリをテーマにした室内オペラや、ヘルダーリンのテキストに基づくオペラのタイトルが『夜』であるのも、そして彼が他の作品のなかでも執拗に光にこだわるのもそれゆえである。

2000年を超えるころから、ハースの創作には闇の対概念として光が登場し始める。『光のなかへ』はその初期の例となっている。曲はピアノとチェロのハ音の強打に始まり、チェロに倍音を多用するスペクトル楽派風のパッセージが、遅れて入ってくるヴァイオリンには音列風の処理が聴かれる。ハース特有の微分音の使用も顕著である。

初演 2007年11月29日 ウィーン楽友協会 シュタイネルナーザール
ウィーン・ピアノ三重奏団
献呈 バーリント・アンドラーシュ・ヴァルガ

●エンノ・ポッペ (1969~)

『汗』

ソロ・チェロ、バス・フルート、バス・クラリネット、ヴァイオリン、ヴィオラのための (2010)

エンノ・ポッペの作品は、日常生活上でのシンプルなものの名前をタイトルにしたものが多い。例えば、『油』『果物』『木』『壁』『森』『列車』『塩』『パン』などなど。共同制作者マルセイユ・バイアーの台本によるオペラのタイトルも『仕事 栄養 住まい』(2007)、『IQ』(2012)といったものであるが、現代オペラ音楽祭であるミュンヘン・ビエンナーレで初演された前者はロ

ピンソン・クルーソーの物語を換骨奪胎したもので、一連のできごととは語られず、いくつかの瞬間、ことばの断片、そして歌そのものに重きが置かれ、それらはわれわれの通常の経験と重ね合わせられる。ロビンソンの救出から始まり、彼の孤独で終わるが、このロビンソンは社会になにも要求しない。救出も、彼にとっては関心の外にある。この作品のなかのアリアを編曲して作られたのがチェロ独奏とアンサンブルのための『汗』である。ここで楽器は最低弦であるC弦上を、基本的に1本の指で音程が取られ、「モルト・エスプレッシブ・ヴォ、PPP」の指示のなか、音同士はグリッサンドで結ばれる。ヨーロッパ外の民族楽器のようなチェロ。このチェロと長く伴走するのはフルートとバス・クラリネットのみ。曲尾近くでようやくヴァイオリンとヴィオラがミュート付きで入ってくる。

初演 2010年6月12日 フライブルク(ドイツ)
アンサンブル・ルシュルシュ創立25周年記念演奏会
委嘱 アンサンブル・ルシュルシュ

●フリードリヒ・チェルハ (1926~)

『4つのパラフレーズ』

オーボエ、チェロ、ピアノのための (2011)

自身、新ウィーン楽派のスタイルに共感を寄せた創作を続け、セリー書法にも通じながら、ベルクの『ルル』第3幕の最初の補筆者としても知られるチェルハは、まさに20世紀後半のウィーン(新ウィーン楽派時代とさして変わらず、保守的な音楽傾向が強い)における現代音楽創作の現場を代表する作曲家である。ハインツ・ホリガー(1939~)の求めに応じて作曲され、彼を含めたトリオによって2011年にカルタウゼ・イッティンゲンで初演された『4つのパラフレーズ』は、各曲に1. ショパンの『スケルツォ第2番』変口短調、2. ヴェルディの『リゴレット』のアリア、3. ドヴォルジャークの『ユーモレスク』、そして4. ヨハン・シュトラウ

ス、オッフェンバック、「ラ・マルセイエーズ」、「インターナショナル」(革命歌)、『ローエン格林』からの引用が用いられている。それと認識できない場合も多いが、チェルハは創作において引用を用いる際、そこに常に自分自身にしか分からない暗喩を込めていると述べており、引用の原曲を異質な要素と組み合わせ、原曲の思いも寄らぬ別の側面を示すことに魅力を感じるということである。

初演 2011年6月11日 カルタウゼ・イッティンゲン(スイス)
ハインツ・ホリガー(オーボエ)、クリストフ・リヒター(チェロ)、
アンドラーシュ・シフ(ピアノ)
献呈 ハインツ・ホリガー

●ジョルジュ・アペルギス (1945~)

『夜の無い日』

ソロ・コントラフォルテのための (2020)

コントラフォルテはコントラファゴットの改良楽器として、ドイツのサクソフォーン制作者ベネディクト・エッパルスハイムと、ドイツ式ファゴットの制作や歴史的な木管楽器のレプリカ制作などで知られるグントラム・ヴォルフが共同で2001年に開発した新しい楽器である。コントラファゴットよりも操作性に優れ、音域に限らず明瞭な音を出すことができる。またデューナーミクの幅も大きく、音域は約4オクターヴ半に及ぶため、表現の幅が格段に広がり、コントラファゴットでは難しかった音楽を作ることができるようになった。クラングフォルム・ウィーンの委嘱で作曲されたこのアペルギスのソロ作品は、そうした楽器の特性を最大限かつ果敢に引き出しながら進む。グリッサンド、重音奏法、微分音、ハーモニクス、声を発しながらの演奏、フラッター・タンギング、息だけの奏法等々。最高音は二点ホ音で、これは『春の祭典』冒頭の通常ファゴット(バスーン)による音型(二点二音まで用いる)よりさらに1音高い。

